成績概要書（2007 年 1 月作成）
－－－

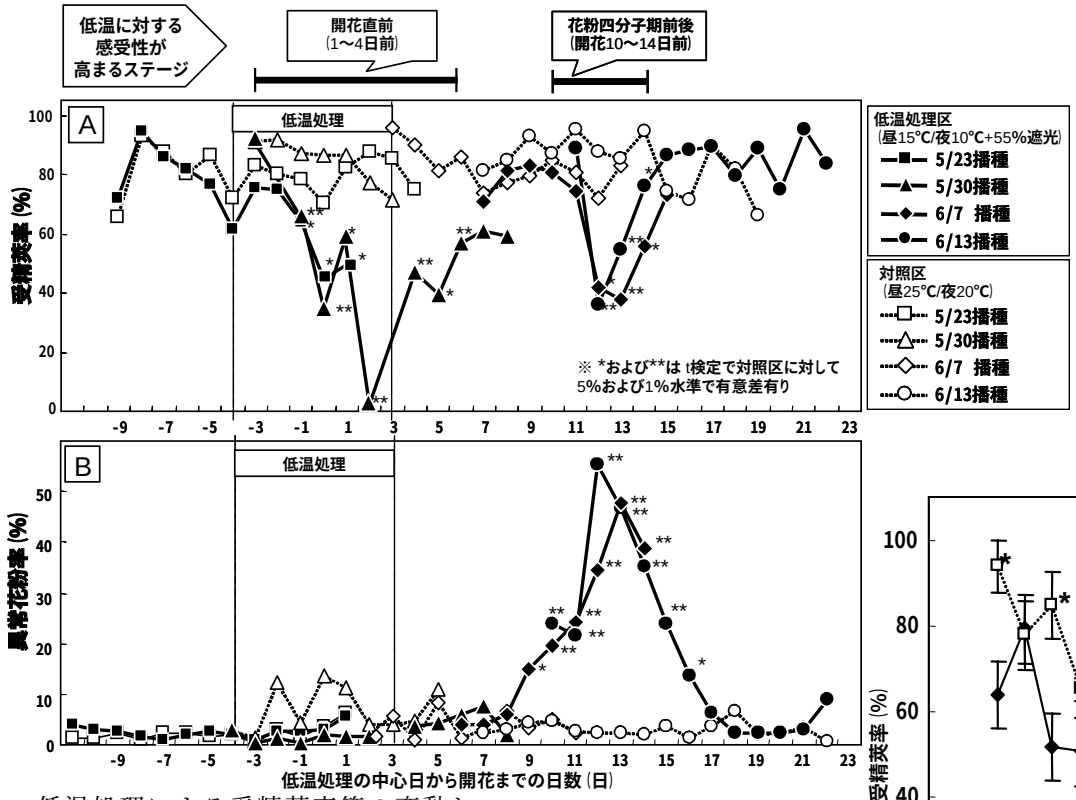

図 1　低温処理による受精莢率等の変動と
低温に対して感受性が高まるステージ

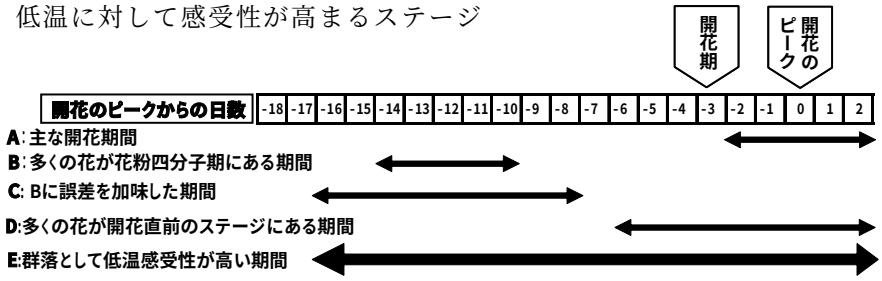

図 2 圃場における低温感受性の高い時期のモデル

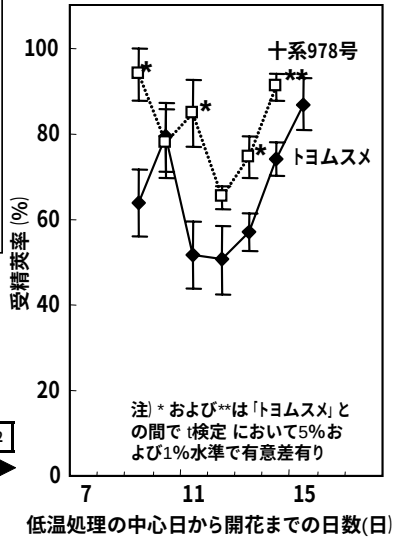

図 3 人工気象室における
花粉形成期耐冷性の品種間差

表1 開花期耐冷性と花粉形成期耐冷性の比較

品種・系統	開花期耐冷性の既往の評価 1)	花粉形成期耐冷性の暫定評価 2)
トヨハルカ	強	中（51）
十育240号	強	弱（43）
十系952号	強	強（88）
トヨコマチ	やや強	弱（40）
十系978号	やや強	強（87）
トヨムスメ	中	中（59）

1）開花始から15℃/10℃(昼/夜）の低温処理4週間による評価
2）2006年圃場における低温遭遇12-14日後の受精莢率の平均値（括弧内の数字、%）より判断した暫定評価

表2 遺伝資源の花粉形成期耐冷性の評価結果概要

遺伝資源の由来	有望	やや有望	同等	劣る〜大きく劣る
東アジア	0	10	2	8
東南アジア	0	1	3	3
中央アジア	0	1	5	10
岩手県	0	0	2	7
北海道	0	4	1	1
育成系統・品種	0	2	6	4
合計	0	18	19	33

注）有望度は「トヨムスメ」との比較、数字は該当する遺伝資源数

4.成果の活用面と留意点

1）開花期耐冷性に加えて、花粉形成期耐冷性の検定と遺伝資源の評価に取り組む。
2）現行の品種・系統の中で花粉形成期耐冷性の強い「十系 952 号」、「十系 978 号」を交配母本として用いる。

5.残された問題とその対応

1）「十系 952 号」等の現行の材料を使って、花粉形成期耐冷性の向上を図るためには、花粉形成期耐冷性の品種間差を簡便に高精度で検定できる手法を開発する必要がある。